『彫刻家の見たいもの―命のかたち・かたちの輝き（Aura 註１）・かたちを 抛（なげうつ）』

東海大学名誉教授　彫刻家　　新関八紘

４造形の要素

	（オ）　造形の要素［道標］	（カ）表れの要素（非意図的情趣）
（ア） 素材の場所	時空　生れでる以前の何か、何処か(註2) 天地、到来、自発、投企、 生成　命（zoe？）偶然＝生、Aura（註1）、変移 有限　独、自、不換、一回＝生、単一 対象（他者）　間　抛(註3) 交感　互換＝生、一如、集中、没入 作者　五蘊（ごうん）＝色（しき）、受，想、行、識(註4)	質感、 色調、 大きさ 重量 風合 自由
（イ） 造形の場所	量塊　面、かたち、重さ、大きさ、立ち フォルム　方向、量・面・前後・左右、軸、 上下、芯、正逆、相対、空間 動勢　捻、飛、躍、蹲、落、反、転、順 逆、静、揺らぎ、進、流、展、傾 昇、降、縮、緊張、弛緩、矯め、 転倒、軸、芯、時、 結像　立ち（pas・？註5）・順・逆・破 結構・配置　位置、定・倒置、広がり、空間、抛	大地性・空間感・時間感 無常（瞬、有限、孤独、死、偶然）感 臨場感（アクチュアリティ）、 苦・快（五蘊＝色、受、想、行、識(註4)）感 心地感
（ウ） 生命の場所 ← 快（→苦）	生成　偶然＝生（zoe？）、独自、アウラ、 身体　活力、快＝生、　熱量、独、露 感覚　視覚＝生（bios？）、触覚＝生、味覚、 聴覚、閃き、直観、生気、露 感動　美、満足、歓、麗、艶、味、驚 衝動　躍動、精気、調子、性、弾み、 情調　活、無常、鬱、愛、悲、苦、歓喜	微、緻、密、生、病、老、死、悲、怨、静、寂、噪、温、洽、鋭、鈍、迅、遅、辛、望、忍、優、破、緊、哀、性、愛、美、絶、雅、鬱、滅、愉、満、苦、怒、懐、艶、妬、媚、弾み、衝、噪、悩、敗、粋、奔、明、憂、硬、軟、清、快、斷、あはれ、滑稽、惑可笑、虚脱、機嫌、解放、孤独、呪詛、抑圧、別離、欲望、驚き、その他
（エ） 美 審 究 の 場所	生動　霊、聖、根源、到来、無常、 生死　空、緊張、無、弛緩、滅 時間性　始、盛、推移、流、破、急、終 純粋性　混じり気のなさ、単一、美 不思議　神秘　未知　絶　偶然	単一、輝き、精力、充実、清朗、持続、麗、安堵、慈悲（愛）、端正、快適、悲壮、永遠、荘厳、自由、揺らぎ、侘び、さび、数寄、神聖、大きさ、崇高、無常、新鮮、その他

彫刻するという造形の場所を説明すれば、下表の（ア）～（エ）までは彫刻が生の営みとして展開される「場」である。（オ）の造形の要素[道標]は彫刻する生の「展開・推移・生成・形成・変移」の目安である。（カ）表れの要素は生まれるかたちは「他者からの解釈領域」に近い「見えてしまう」とでも言えるのであろう。細部の要素の内容はランダムに示しただけである。

５造形の展開・推移（上表に基づいて）

○**素材の場所**　立ち（pas・パ？註5）　素材を置く（立たせる）。

現在はカーヴィング（木彫）をする。理由は、素材が生きている（？）ことと、一回＝生を保つために型複製を拒否したい。大まかなかたちが素材に入る見当をつける。

素材の大きさを活かす努力は制作の場を自由にする問題であり、素材自体の持つかたちは「生まれでる以前の何か、何処か」（註1）を孕んでいる。

○**結構**　作業は彫り捨てることのみ、有り方、立ち方（結構）、は呼吸と同じように不断に検討されなければならない

○**生成**　彫った結果としてのかたちは、次のあらたなかたち展開への素材である。既知とは違うエネルギー・命（soe？）のアウラ（註1）を放つかたちに出会えればうれしい。

○**造形の場所**　構想・計画は出来るだけ緻密に綿密に張り渉された活動・局面の展開を第一義に練られていたほうが良い。動勢は像と次の像との相互の瞬間に起るズレでもある。生きている証拠？

○**生命の場所**　個別を超えた生命を考える。制作に向かう“この時空”条件（例えば時代、風土、季節、体調、情調など）一回＝生の営まれる制作葛藤、試行をも素材として、たちあがってくるかたちの「生成」を待つ。与えられている存在的・身体的与件、感覚、能力、エネルギー、境遇、性格、才能、めぐり合わせ的タイミング、も素材である。

造形の要素によって生まれでるかたちは、「かたち」の誕生＝発現として捉え、抵抗せずに抛（なげうつ）っておく。

○**“かたち①”**　に出会う。　「意図するかたち」と「恣意的、無意識なかたち」との間には、必ず同じ熱量で互いの反対側の、かたちが潜んでおり、説明のつかない未知の展開をして来るものである（配置・結構）。注意しておくべき事である。

（ロダン　『青銅時代』ロダン美術館）

（モデルベルギー人工兵オーギュスト・ネイ）

○“**かたち②**”に出会う　今見た、感動に衝き動かされて現れ出てしまう情趣による非意図的なかたちの変移（結像）。動勢のような瞬間の連動にも注意する・・・

○“**かたち①②**”　さらなる制作過程の思考、快への欲望、実存的あり方の「総体」（仏教で言われる五蘊（註3）・・・、作者の業（ごう）である。苦の因（もと）らしい、弱さでもあろう。困ったものであるのだが、また裏腹に快のもとでもあり、美のもとでもあるので素材となる。）によって変化するかたちの探索を重ねる。

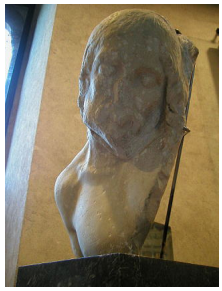
現れる新たな命の、輝き（アウラ）が伴っているであろうものを成り行きに従って取捨選択しかたちを残す。

○**(エ)美の審究**　大切な判断の基準である。基本的に心地良くないといけない。不快なことはしない。美くしなければならない。内容に悲や苦、劣情がおこっても最後は美に向わなければつまらない。生きる悦びなのかもしれない。

○“**かたち③**”　（命）に出会う。納得がいくか、気力が途絶えれば、終わる。

熱量の問題である。これが彫刻と考える。・・・私の見たいものである。

（ミケランジェロ『ピエタ＝ロンダニーニ』・ミラノ・スフォルツア城



彫り棄てられた基督の顔）

○ **(カ)表れの要素・非意図的情趣**　生き方の類型的認識を指しており文学的・仏教的な認識（註3）の説明と重なる。これを主題に仕事を始めることはない。意図に仕組まない理由は、生に派生する情趣を意図して露呈するのは嫌味が走り、美しくないからである。だが、生まれるかたちのうち時おりアウラを放って見えるかたちであれば、新たなかたち③の発見でもあるように思う。

（以上）

註１　Aura(アウラ)

　　ベンヤミンによれば「エロス的な欲情を喚起するような対象が発するもの」「幼年期に特有の至福の神的経験において現れる対象が持っているような性質」「芸術文化に対して抱く一種の共同幻想」「同一時空間上に存在する主体と客体の相互作用により生じる変化及び相互に宿るその時間的全蓄積」

（『複製技術時代の芸術作品』ヴァルター・ベンヤミン）

註2　ポール・ゴーギャン（ボストン美術館）

『われわれは何処から来きたのか　　われわれは何者か　　われわれは何処へ行くのか』

註3　　千利休　遺偈　　『人生七十　力囲希　咄
我這ノ宝剣　祖仏共殺ス
提グル　我　得具足ノ一太刀
今　此時ゾ　天ニ抛』

註4　　五蘊（ごうん）（「般若心経」「蘊」は梵語 skandha 集合体の意）現象界の存在の五種の原理。色・受・想行・識の総称で、物質と精神との諸要素を収める。色蘊は物質及び肉体、受蘊は感受作用、想蘊は表象、概念などの作用、行蘊は意志・記憶など識蘊は認識、判断作用・または認識の主体的な心。また宇宙全体の構成要素ともされ、絶えず生滅変化するものなので、常住不変の実体はないとする仏教の根本教説。（広辞苑）

註5　　pas パ　立つこと、静止ではなく動作である。ここではバレエ用語を借りた。